

ポジティブリスト対象害虫の解説

ツトガ科の一種

学名：*Hendecasis duplifascialis* Hampson
英名：なし

本種はマツリカ（アラビアジャスミン *Jasminum sambac*）の重要害虫とされ、主につぼみを加害する。加害された部位には穴が開くため、商品価値が著しく損なわれる。

輸入植物検疫では当該植物の生花等で作られたガーランド（花輪など花や葉、実で作られた装飾品）から幼虫態で頻繁に発見されている。

分布地域：インド、スリランカ、東南アジア、台湾、中国等。

寄主植物：ソケイ（ジャスミン）属、ラン科、クチナシ属、プルメリア属等。

形態：成虫の前翅長は4～6mmと小型。雌雄の外観はほぼ同じで、翅の地色は白く、触角は前翅長より短い。後翅内縁及び腹部背面中央に明瞭な帯状の黒斑を有する。終齢幼虫の体長は約10mmで、頭部及び前胸背面は黒褐色、胴部は黄緑色～乳白色。

識別：現在、日本国内には同属種が2種分布している。このうち、アカモンヒゲナガノメイガ（*H. pulchella*）は触角が前翅長より長く翅表の地色が赤茶色であること、ウスアカモンノメイガ（*H. minutalis*）は後翅外縁に黒褐色紋があることから、外観で容易に識別できる。

防除：加害されたつぼみの除去、ライトトラップによる成虫の誘殺が有効とされている。なお、海外では殺虫剤（マラソン、エンドスルファン及びNSKE）も使用されている。

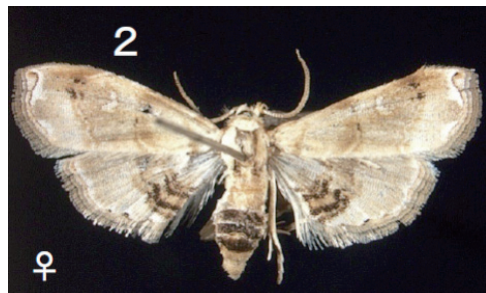


図1 *H. duplifascialis* 終齢幼虫 図2 雌成虫

オリーブミバエ

学名：*Bactrocera oleae* (Rossi)
英名：Olive fly

本種はアフリカ原産と考えられており、地中海沿岸、アフリカ、中東でオリーブの重要害虫として知られている。

米国では1998年にロサンゼルスに侵入し、殺虫剤（マラソン）の散布等による防除が試みられたが、分布は拡大し、現在では、カリフォルニア州のオリーブ産地全域で発生している。

分布地域：地中海沿岸諸国（イタリア、スペイン、ギリシャ等）、アフリカ（エジプト、ケニヤ、南アフリカ等）、中東、南アジアの一部、アメリカ（カリフォルニア州）、メキシコ等。

寄主植物：オリーブ（*Olea europaea*, *O. verrucosa*, *O. chrysophylla*）。

被害：主に幼虫が果実を食害し、落果、収量の低下、また、幼虫の混入によるオリーブ油の品質低下が生じる。

形態：成虫は体長約5mm。胸背は黒色～茶褐色で、黄色の側縦帯がない。肩瘤は黄白色で肩瘤剛毛がない。翅は大部分が透明。腹部は中央が黄褐色、側部が黒色。脚は黄色。3齢幼虫は、ウジ状で体長6.5～7mm。

識別：日本既発生種であるサタミバエ（*B. pernigra*）やミスジミバエ（*B. scutellata*）（写真右上）とは、胸背の黄色の側縦帯の有無により識別できる（上記2種には胸背に黄色の側縦帯がある）。

生態：雌成虫は寄主果実の果皮下に通常1卵ずつ産卵する。2～4日後にふ化し、幼虫は10～14日間果実を食害する。幼虫は果実内で蛹化するものと、果実から脱出し、土中で蛹化するものがある。蛹期間は約10日であるが、気温によっては延びて、蛹で越冬する。成虫は約1週間で成熟し、1～2ヶ月生存する。

防除：米国では蛋白質加水分解物に殺虫剤（マラソン）を混合した薬剤の散布が行われている。なお、雄を強く誘引する誘引剤は知られていない。



図 *B. oleae* 雄成虫（右上はミスジミバエ）